

インタビュー

トヨタ自動車(株) 環境部担当部長 山戸昌子氏

「低炭素・資源循環型社会」の構築目指す

初代プリウス(1997年発売)は環境性能はいいが収益を圧迫すると言われたが、その後主力車種に成長。「環境のトヨタ」のブランドイメージアップに大いに寄与した。そのトヨタが究極のエコカーと言われる燃料電池自動車(FCV)の「MIRAI」を発売、なおかつ特許の実施権も無償で提供し、FCVの普及に向けての本気度を見せた。車のライフサイクルのあらゆる段階、全ての事業領域を通じて「低炭素社会」や「資源循環型社会」の構築に向かおうとするトヨタ。その取り組みの実態をお聞きした。(聞き手:本誌編集長 間島輝利)



究極のエコカー
燃料電池自動車「MIRAI」

究極のエコカー 燃料電池自動車「MIRAI」発売

——トップの環境に対する姿勢は？

サステナビリティレポート冒頭の社長メッセージにあるとおり、「クルマづくりを通して社会に貢献する」ことがトヨタの創業の原点です。温暖化、環境問題、エネルギー、資源不足などのクルマを取り巻く社会課題の解決に真摯に取り組んでいます。豊田社長の想いでもある「地球環境との調和を目指したクルマづくり」への挑戦の一つとして、昨年12月に燃料電池自動車(FCV)の「MIRAI」を発売しました。走る時にCO₂や環境負荷物質を排出せず、走行距離や燃料充填時間などの使い勝手の面でもガソリン車に遜色がないため、トヨタはFCVを「究極のエコカー」としてのポテンシャルがあると考えています。

——MIRAIは走行距離が長いですね

MIRAIは、燃料電池(水素と酸素から水を作る過程で化学的に電気を発生する装置)を使ってモーターを動かして走行するクルマです。フル充填で約650km走行します。電気自動車(EV)の走行距離は100～200km程度ですが、MIRAIで

使う水素はEVのバッテリーよりもエネルギー密度が高く、同じ体積あたりのエネルギー量が多いため、走行距離を長く設定できます。また、燃料である水素の充填も、ガソリン車と同じようにボディにある充填口から、水素ステーションの専門スタッフが3分程度で行います。こうしたことから、MIRAIの販売は、「クルマづくりを通して社会への貢献」の重要な一歩であると考えています。

「地球環境に寄り添って」

——環境マネジメントの基本的な理念や方針は？

1992年に制定された「トヨタ基本理念」のもと、環境に対する取り組み方針として「地球環境憲章」を同年に決めました。この憲章では、基本方針として、「豊かな21世紀社会への貢献」、「環境技術の追求」、「自主的な取り組み」、「社会との連携・協力」の4つを掲げています。さらに、行動指針として、クルマの「生産・使用・廃棄の全ての段階でゼロエミッションに挑戦」をはじめ「いつも環境に配慮」することなどを定めています。一方、2011年に発表した「トヨタグローバルビジョン」の中で、環境については、「地球環境に寄り添う意識を持ち続けること」としています。こうした理念や方針に基づき、「トヨタ環境取組プラン」として5カ年の活動計画と目標を定めています。このプランでは、「低炭素社会」、「循環型社会」、「環境保全と自然共生」の構築の3つを重要テーマと位置付けています。現在、5次プランが進行中で、今年が最終年度です。